

(昭和29年12月20日掲載)



ある夏の日盛りであります。一人のろうたけた旅姿の姫がとぼとぼと、山国谷をさ迷ってきました。が、肥前屋の辺りで一寸ためらい、市平谷へ登って行きました。後ろ姿は旅に馴れないらしく如何にも弱々しい足取りであった。

その姫は、或る旧家の門前でピタリと止まったまま動かない。編笠を目深く被っているの、その顔は歯見られないが、年の頃十七八のみめ麗しい姫らしい。

やがてその家の主人要平さんが出て来て、何か暫く話していたが、顔見知りの者らしく家の中に招き入れた。近所の人話によると、その姫は要平さんがよくお参りする玖珠の龍門寺の一人娘であって、或る理由で親に勘当され、行く所が無く尋ねてきたとの事であります。

今に姫を親許に連れて帰るか、親が迎えに来るかと思っている内に、二、三日が二、三ヶ月になり、それが二、三年にもなりました。

要平さんは相変わらず龍門寺に御寺参りに行きますが、姫は連れて行きません。近所の人々も少し気味が悪くなりました。それと云うのも、その

姫は要平さんの家で何をしているのだろうと云う疑問です。滅多に外出もせず、村人に顔を合わせた事が無いのです。たまたま顔を合わせた事があっても、少々青ざめていると云うだけで、どうも顔がはっきりしません。

要平さんも村人の手前をつくろいながらも、和尚さんの云うまあ暫くあずかってくれと約束した関係で、今か今かと待ちながらも今日まで心棒をしたのですが、よく気をつけていると毎日毎日の姫の様子がおかしいのです。初めの内は気も止めませんでした。が、近頃段々にその疑いが濃くなりました。

すると姫は病気だと云い、部屋を閉め切って、寝ついてしまいました。そうなるとうとう我慢出来なくなり、今夜こそと思った矢先、枕元に要平さんを読んで「どんな事があっても、今晚、私の居間を見ない様に」と頼みましたので、人情にほだされて要平さんもとうとう見ない事を誓いました。

何しろ正直な堅人ですから、遂に欲望をおさえて、寝てしまいました。するとその晩、夢を見ました。

和尚さんが尋ねて来て、姫の部屋をのぞくと身体に変化があるから、くれぐれも見ないようにと告げて立ち去り、その次に要平さんは、こっそり起きて姫の部屋を戸の隙間より中をのぞいたのです。

するとどうでしょう。その部屋には姫の姿がは見え、部屋いっぱい大蛇あとぐるを巻いているではありませんか。暗くてよく判りませんが、月夜の薄明りで輝いていますし、二つの目が大きく光っています。

その翌朝目が醒めてあまりの不思議さに、それが夢でよかったと思いました。姫の様子も殊更何事もないようですので、要平さんはやや安心しました。約束を守ってよかったと云うよろこびの気持ちです。

それからまもなく旱天続きで、雨が降らねば、稲の枯死するのを待つばかりです。各地で雨乞いが行われましたが、少しもききめがありません。このまま雨が降らねば、田と云わず、畠の作物は全滅です。村中の人々が要平さんの家に集まって相談した結果、雨乞いをしようと云う事になり、その大役を要平さんが果す事になりました。

日頃、信心の篤い人ですから、[齋戒沐浴](#)して神仏の加護を祈りました。

その晩です。おもての戸を叩く者がありますので、おそるおそる出て見ると、龍門寺の和尚さんではりませんか。「姫が長い間お世話になった。三年三ヶ月の間に姫は龍神の子を産み落とす事が出来た。之もお前が御仏の約束を守ったからだ。お礼に必ず雨を降らせて進ぜる。中詰の蛇淵にお供物をして祈れ」とおごそかに云いました

何だか姫が母親らしい愛情で龍子を抱いて別れを告げたような気がしてなりません。要平さんは、姫が生んだという龍子を見たくてたまらず「和尚さん、和尚さん」と叫びながら、市平谷を追っかけて行きました。市平の村人たちが、[中詰の蛇淵](#)で盛大なお祭をした時から、大雨が降って村中が大悦びだった事は云うまでもありません。(完)